

## 『令和4年度 愛知県母子寡婦福祉大会』

令和4年11月20日、令和4年度愛知県母子寡婦福祉大会が小規模ながら無事に終了しました。



### 「中日賞 思わぬ展開 … しかし今は生きがいでもともしあわせ」 瀬戸市 松本紀子

25歳の時、2歳年下の夫と結婚、義父と義妹の4人の新婚生活が始まりました。家政婦の如く、家事に追われ、4人の生活は私にとって思ひもよらぬことばかりおこり、今までの私の人生において経験したことのない、筆舌につくしがたい出来事ばかりでした。

子どもは3人いましたが、二男誕生後、いわゆる血の道になり、育児もままならず、その後、ノイローゼ、鬱になってしまいました。私さえこの世からいなくなれば、全て上手くいく、そこにたどり着いた私は、ある寒い冬の深夜、ガス栓をひねり自殺をはかりました。子ども3人は死なせてはいけないと、キッチンから一番遠い部屋に寝かしつけ自分一人で死のうと思ったのです。

意識朦朧となってきたところまで、記憶がありますが、気がつけばキッチンの冷たいピータイルの上に、私はいました。

無意識にガス栓を止めたのだと気がつきました。あっ!! 私は死にたくないんだ、生きていたんだ!!と、はつきり思いました。

それから2年後、35歳の時、2歳の二男を背負い両手には長女、長男の手をしっかりとにぎって家を出、1人暮らしの母の元へ、実家へ向かいました。

私の父は戦死の為、母がいただく軍人恩給を頼りに5人の生活が始まったのです。

とにかくお金がなかった、貧乏でした。働かなくては!私が働いて収入を得なければと、朝も、昼も、夜は血洗ひ、働きどうして、とうとう倒れてしまいました。

そんな時、頼りにしていた母が乳ガンになり、子どものめんどうも、みれなくなりました。

私といえは、この頃働きだした保険会社の仕事が忙しく、日曜日仕事、夜も仕事、頭の中は仕事のことばかり、食事の世話する時間もなく、3人の子どものはほたらかでした。

羨もったものではありませんでした。親はなくても子は育つ、とはよくいったものです。3人共まがりなりに社会へでてくれました。

長女は3人、二男は2人の子ども、私には5人の孫ができました。これで私の老後は万々歳、75歳まで仕事して、さあこれから旅行とかして余生をすごそう!なんて…1人ぐらいいいな~なんて…思った矢先でした。

思わぬ転回がございました。25年もの間、名古屋で1人暮らしをし起業していた長男の突然の入院でした。

5歳の頃から、私の手をわずらわせることなく、自分の事は全てやり、手のかからない子でした。倒れたのは48歳でした。

脳梗塞、脳出血、何度も倒れ、何度も入院、高次脳機能障害にもなり言葉もでてこない、うまく歩けない、小3位の計算もできない。とうとう障害手帳のお世話になってしまいました。

何でも自分のことは1人でこなしてしまう、立派な昔の長男ではなくなっていました。

今では、瀬戸へつれて帰り、養生していますが、今こうして介護しているのも、今まで何ひとつめんどうをみてやれなかった罰かな?と思っています。手をかけてやれなかった長男に、私の余生のすべてをささげようかなと、めんどうをみてあげようかと思っています。

その為に私は長生きしなければならない。長男を残して死んでも死にきれません。

そんな事を思う毎日です。母をみおくり、今は子どもに戻ってしまったような長男といっしょに、認知も少し入ってきた自分の体もいたわりつつ、二人で生活しています。

それが、今は生きがいとなり、私にとって、とてもしあわせです。

### 「中日賞 苦労苦労の連続 … 今はしあわせ」 西尾市 神谷弘子

父は世界第二次大戦で戦死しました。母子家庭の三姉妹の二女として成長し、昭和40年に同じ会社に勤務する夫と結婚に至り、私の実家が新居で生活が始まりました。1年後に長女、4年後には二女と子宝に恵まれ、7年後には岡崎に家建て親子4人のごく普通の家庭のスタートでしたが、1年が過ぎた頃から何かと考えるの違ひを感じつつ生活していましたが、ことごとく意見の違ひが日ごとに増し、広がった夫婦間の溝は修復不可能となり、約1年の別居の末、子どもたちの親権は私で離婚いたしました。ただ子ども達に申し訳ない思いで胸が痛みました。

母子家庭になった当初はアルバイトと母の援助を受け生活をしていましたが、このままではいけない、何とかしなければと思い、看護師を目指し病院に就職、病院長には事情を説明し、私の志しをわかって頂き働くことが出来ました。ところが3ヶ月が過ぎようとする頃、先輩からの「いじめ」に遭いました。母と相談の上断念!!

そうこうしているうちに、姉夫婦が起業したトヨタ系の会社に昭和51年に入社出来ましたが、2年後に卵巣腫瘍で入院、手術の前日に卵巣のねじりが治っていた!この様なことは30万人に1人の割合だそうで、無事退院。

母にはその都度、その都度、涙涙の感謝です。この頃一色町母子寡婦福祉会の役員さんに、誘われ入会致しました。

昭和54年12月に母が他界するまで援助を受け生計を維持してきましたが、これから自分の給料で、やりくりの始まりです。貰った給料を食費・学費・光熱費等を封筒に分け入れ、計画を立てて切り詰めた生活の中、苦労苦労の連続でしたが、子ども達は愚痴も言わず協力してくれました。

その後、給料も上がって来た頃、児童扶養手当の支給が開始され生活も安定してきました、此の頃になってやっと子ども達とピクニックに行ったり、三ヶ根山を描く会に参加したり、習字を共に習い貧しいけれども楽しい家庭を築くことができました。人生は色々な事に、ぶつかりながら生きてゆくのだなあと、つくづく思いました。

昭和61年に一色町母子寡婦福祉会地域の班長、翌年に副会長として会の運営に携わり、新会員募集や児童手当増額の運動に参加し微弱ながら会に尽くしてまいりました。平成23年に西尾市と合併になり西尾市母子寡婦福祉会監事として現在に至っております。

今は、40年勤務した会社を退職し年金暮らしをしながら民謡の三味線と唄を20数年とハルマンハーブを10数年と現在も、お稽古に励んでおります。

最後になりましたが2人の娘と孫娘も結婚して、幸せな家庭を築いております。男子の孫は銀行マンになって頑張っております。それから6歳の男の子3歳1歳の女の子の、ひ孫にも恵まれました。ご清聴ありがとうございました。



左：神谷さん 右：松本さん